

変わる 英語教育

拠点校の取り組み

学校での英語教育が様変わりする。小学校で教科になり、中学、高校では「高度化」を目指すのが国の方針だ。東広島市の西条地区は同じ地域の小中高校が一体的に指導、学習方法の確立を図る文部科学省の「英語教育強化地域拠点事業」の委託を受けている。2020年度に始まる次期学習指導要領を見据えた4校の取り組みを報告する。

(新本恭子)

▶上◀

小学校



給食の内容について広島大の留学生に英語で話し掛ける東西条小の児童

会話・表現学ぶ意欲養う

キャロット。チキン。東西条小の5年生が今月上旬、英語で給食の食材を紹介していた。招待した広島大の留学生を相手に身ぶりや表情でコミュニケーションを交えて懸命だ。松原葵さん(11)は「もっと勉強し、もっとしゃべれるようになりたい」と目を輝かせた。児童はこれまでに献立の名前や味、食材に関する表現や語句を学び、練習してきた。この日は今回の単元のゴール。福岡克中校長は「活動的なゴールの場を設けることで、学習に目的意識を持たせたい」と狙いを説明する。

語学力向上へ 全教員が研修

に期待が懸かる。他校の5、6年生が現在取り組んでいるのは週1回(45分)の「外

国語活動」だ。小学校英語の課題の一つに挙がるのが教員の英語力である。両小では各担任が授業を受け持つことになる。授業を受け持つことになり、学校ぐるみで事業に向き合う。英語教育に関して両小の全教員が参加する研究会を設け、部会内にある三つの部のうち「英語力向上部」で英語力アップに努める。広島大の教員から助言を受けて合同研修もする。

教科になると評価する必要も生まれる。両小は、小学校段階では読み書き能力を見るペーパーテストはなじまない判断、授業中の様子から到達度や意欲を見たいという。評価指標の一つとして、英語で自己紹介や質問に答え答える「インタビューテスト」の導入も検討。テスト中の姿は動画撮影して教員が共有するなど評価の物差しをそろえる工夫もする。

英語に苦手意識があるという御園宇小の岡本理那教諭(31)は「子どもにも自信のない姿は見せられない。度胸を決め、笑顔で英語を使わない」と意気込む。

御園宇小の河下正紀校長は「小学校で英語嫌いをつくりたくない。コミュニケーションへの意欲を伸ばしたい」と目指すべき方向性を思い描いている。

クリック

英語教育強化地域拠点事業 小学校での英語教育拡充、中学校での高度化を掲げる文部科学省の「英語教育改革実施計画」を踏まえ、2014年度にスタートした。現在、全国で29件が採択され、それぞれ17年度まで研究を進める。広島県内では東西条、御園宇の両小、松賀中、賀茂高の4校が連携して取り組む。小学校20年度、中学校21年度、高校22年度以降に全面実施となる次期学習指導要領では、小学5、6年生の外国語活動を教科としての英語に格上げする方針が示されており、文科省は拠点事業の研究成果を生かす考え。